

英米文学への俳句の移入

—Imagist に至る経路—

岩 原 康 夫

(一)

英米の現代詩は、Imagism とその当事者たる Imagist の詩に始まる。この御墨付きを与えたのは、他ならぬ T.S. Eliot で、彼は“American Literature and American Language” という講演において、「現代詩の出発点と 通例考えられる 適当な 規準点は、1910年頃ロンドンにいた『イマジスト』と呼ばれるグループである」^{註1)}と述べている。その Imagist は、又俳句を英米文学に導入する上においても、先駆者であり、決定的な役割を演じた。本論は、この Imagist が俳句に興味を持ち、それから影響を受けたという事実を前提にして、その移入経路の問題を調査し、考察することを主要な目的とするものである。

もっとも、Imagist 又は彼等の詩の運動を表わす Imagism という概念は、それ自体極めて複雑な文学史上の問題を含んでおり、本論の対象とする Imagist の概念を明瞭にしておく必要がある。本論で使用される Imagist という言葉は、主として文学史上の名称であり、近頃では、Eiffel Tower グループと呼称されるものである。即ち、それは1909年3月25日ロンドンのソホーの一レストラン Café Tour d'Eiffel (英語読みで Café Eiffel Tower) の会合に参加した詩人のグループのことであり、そのグループの詩の考え方の中に後の文学運動としての Imagism の萌芽があるという意味で使っているのである。この会合のグループは、T.E. Hulme, Joseph Campbell, F.S. Flint, Edward Storer, F.W. Tancred, Florence Farr 等であり、この他にも無名の人物が一人か二人いた模様である。決して、当時彼等自身が Imagist を自称したわけでも、Imagism という文学運動を行っていたわけでもない。それは、ほとんど無名に近い文学者の非組織的な集会であった。

この会合が催されるようになったのは、既存の文学者の集まりであった Poets' Club が出した *For Christmas* MDCCCVIII (この中に T.E. Hulme の詩“Autumn”と“A City Sunset”が入っていた。) という小冊子の詩を、F.S. Flint が *The New Age*

誌の書評で批判攻撃し、それに対して T.E. Hulme が反論するという関係から生まれたものであり、最終的には、1909年3月25日 T.E. Hulme が Café Tour d'Eiffel に Flint を招待するという手順で成立した集会であった。従来、Poets' Club の創設者を T.E. Hulme とし、その発展的解消のもとで、1909年3月25日の会合が誕生したように解されていたが、それは誤りである。^{注2)}

新たに生れたグループは、前述したように決して組織立った体裁を採っておらず、曖昧な形で T.E. Hulme が主宰者であり、同年の夏頃までは週単位の会合を開いていたが、秋には何も記録が残っていない所をみると、短期間で自然消滅したようである。^{注3)}だが、このグループこそが、その会合に出席して、自分の詩“Sestina Altaforte”を読んだことのある Ezra Pound をして、三年後に“The forgotten School of Imagisme”(忘れられたイマジズム派)^{注4)}と呼ばせた Imagism と Imagist の源流であり、1912年頃から始まる Pound を熱心な推進者且つ宣伝家とする第二期の Imagist、更には1915年から17年にかけての Amy Lowell 等による *Some Imagist Poems: An Anthology* のグループに、日本の俳句が関心を持たれ、実際に影響を及ぼすことになった震源地である。Flint は“The History of Imagism”で、この Imagist の源流となったグループと俳句の関係を次のように述べている。

At that time (late in 1908), I had been advocating in the course of a series of articles on recent books of verse a poetry in *vers libre*, akin in spirit to the Japanese.....I think that what brought the real nucleus of this group together was a dissatisfaction with English poetry as it was then (and is still, alas!) being written. We proposed at various times to replace it by pure *vers libre*; by the Japanese *tanka* and *haikai*; we all wrote dozens of the latter as an amusement.....^{注5)}

けれども、1909年の Imagist (以後本論では、Eiffel Tower グループという言葉の主として使用する。)が皆、俳句を「遊び」として数十書いたことは分かっても、どのようにしてそれまで英米の文学者に無縁であった日本の俳句を知るようになったか不明である。グループの誰一人として、日本文学研究家であったことも、又日本語を知っていた形跡もないのである。当然考えられることは、他の日本文学研究家及至は翻訳者のものを通して知ったということである。もっとも、グループの誰かが在英中の日本人と知己になっていて、俳句に関する知識を得たという可能性も皆無とは言えないが、現在の所入手し得るグループの詩人の経歴から推定して、今は顧慮するに値しない。従って、Eiffel Tower グループの俳句の移入経路は、第二次的に翻訳を通し

て入ってきたという前提にたつて、今までの研究もなされてきたし、本論もこれを踏襲するものである。

その移入経路に関する有力な仮説の一つが、フランス人の翻訳を通して、Eiffel Tower グループに入ってきたというものであり、これを主張したのが Earl Miner である。彼は、*The Japanese Influence on English and American Literature, 1850~1955* の博士論文、その論文に基く *The Japanese Tradition in British and American Literature*, 更に *The Hudson Review* の “Pound, Haiku and the Image” の研究論文等で、終始一貫 Imagist の俳句の情報源は、フランス訳に由来すると主張している。その推論の根拠は、要約すると、英米の日本研究家の俳句に相当する用語が主として「発句」であるのに対して、Flint が俳句の意味で使った言葉は、「俳諧」という用語であり、これはフランスで使用されたものと一致するという理由に基く。^{註6)} Miner の仮説が、結果的に正しいことは後に述べるが、その具体的な翻訳を指摘していない点に大きな弱点がある。

従つて、本論は、まず Eiffel Tower グループの俳句の知識の一つが、Flint を媒介としてフランス訳経由で入ってきたというフランス経由説を、具体的に実証しようとするものである。第二に、この証明に不可欠な前提であり、副次的に第一の結論を補強する実証的な調査として、西欧の英米仏独を中心とする俳句の翻訳史を概観し、Flint に至る俳句移入の連鎖反応的な歴史を追跡する。第三点は、Eiffel Tower グループが俳句を知り、受容し、「遊び」として書くに至る動機と理由を歴史的な観点において探り、必ずしもグループが俳句を知るようになったのは、フランス訳からのみとは断定し得ない根拠を論証し、最後にグループに至る俳句の移入経路に関する私の結論を述べるものである。

(二)

従来、1909年の Imagist のグループが俳句を知っていたこと、「遊び」として数十書いたことは、前に引用した Flint の “The History of Imagism” の証言で知られていたわけであるが、彼等の俳句が書き捨てで現存していないことと、このグループの各々の詩人の活動に関する研究が不十分な為に、彼等の俳句の知識に関する具体的な手懸りが全くなかった。けれども、Wallace Martin の *The New Age under Orage: Chapters in English Cultural History* (1967年) が出るに及んで、Flint の *The New Age* 誌における書評の活動に光が当てられ、彼が T.E. Hulme と Eiffel Tower グループの会合を持つ以前に俳句のことを知っていた事実が発見された。それは、同誌の

1908年7月11日号の Flint の書評に、実際次のような俳句が引用されているからである。基礎資料の一つであるので、関係ある部分を全て示す。

Recent Verse

As I turned over the pages of these Japanese Sword and Blossom Songs, my fingers trembled with delight. Surely nothing more tenderly beautiful has been produced of late years than this delicate conspiracy of Japanese artist with Japanese poet! The Blossom Songs, taken from the famous Kokinshu Anthology of A.D. 906, and the Sword Songs of late date, are completed and explained by the exquisite illustrations on each page. It is a pity, however, that the translators did not choose some other measure than the heavy English rhymed quatrain. It is probable that nearly all the spontaneity of the Japanese tanka has thus been lost. The Japanese, we are told, are quick to take an artistic hint; in fact, even the most lowly are all poets (or should we say, were poets?); and “to them in poetry as in painting, the half-said thing is dearest”—the suggestion not complete picture (one thinks of Stéphane Mallarmé). A word will awaken in them, therefore, a whole warp and weft of associations. Take this haikai, typical of a common form of Japanese poetry:—

Alone in a room

Deserted—

A peony.

Or

A fallen petal

Flies back to its branch:

Ah! a butterfly!

I could have wished that the poems in this book had been translated into little dropping rhythms, unrhymed; but the translators thought it due to the English Cerberus that they should be “done into English verse.” The Sword Songs are akin in spirit to the similar songs in the Bard of the Dombavitsa. 注⁷⁾

Flint が書評している *Sword and Blossom Poems* (外題は songs ではない。)は、絵入りの翻訳詩集であり、東京で長谷川武次郎(彼は、当時洋酒等の輸入業を営んでいた。)によって、1907年(明治40年)11月20日に発行されたものである。この本に関しては、佐藤和夫先生が「英語文学世界」の1975年8月号、『『剣と華』雑考』注⁸⁾

で詳細に述べられているので、詳しいことは略するが、その翻訳の内容は、古今集の短歌と新しい漢詩文であり、Flint の引用した俳句はおろか、俳句への言及すらない。僅かに Flint が引用している「絵画の場合と同様に詩にあっても、彼等（日本人）は言わんとすることを半ばで止めておくことが、極めて好きである」^{註9)} という箇所が、この本からの直接引用である。

では、日本語の出来ない Flint が引用した俳句は、日本の俳人の誰の作であり、それをどこから彼は手に入れたかという問題になる。Flint が引用したものには、作者名がないが、最初の句は、蕪村の「寂として客の 絶間の 牡丹かな」^{註10)} と考えられる。「人去りし部屋に唯一つ牡丹」という Flint の英訳に、この蕪村の句が完全に一致するとは、勿論言えない。まず蕪村の句は、屋外の牡丹を描いたものであって、賑わっていた牡丹園の見物客が一時絶えて生じた静寂と、その静寂の中で夏の陽光をあびて、豊満華麗な花を咲かせている牡丹を表現したものである。それに反して、Flint の英訳では、人気のない忙しい部屋の、多分花瓶にでも活けられた一本の牡丹を表わしたものであって、何か孤独な淋しさを漂わせたイメージが基調になっている。従って、両者のイメージは、ほとんど対蹠的と言えるが、それは、蕪村の原句の中七「客の 絶間の」の「間」を「部屋」と誤訳した、Flint の依存した訳に由来するものと思われる。勿論、蕪村の句と断定することに疑問の余地が全然ないとは言えないが、翻訳される原詩というものは、その国の代表的な詩人の詩や広く人口に膾炙された詩であろうから、それを牡丹の句で探すとすれば、この花の豊満華麗な美を愛した俳人は、与謝蕪村をおいて考えられない。実際に、私が代表的な俳人について調べた範囲でも、蕪村には23句の牡丹の作があるのに比して、芭蕉の場合は僅か4句である。しかも、両者のイメージの焦点は、あたかも両者の詩的本質の対照を示すように、前者が主として牡丹の持つ華麗な美に向っているのに対して、後者は「牡丹薬」の如きものに向っている。正岡子規も、「俳人蕪村」でまず牡丹の句において、芭蕉と比較して彼の「積極的な」美について述べている。^{註11)} 恐らく、蕪村の牡丹の句の多さは、この他の俳人と比べても、際立った特徴として出てくると思われる。だから、牡丹の句の俳人を探すとすれば、蕪村を最も相応しい俳人と考えるのが妥当であり、彼の句の中では、「寂として」の句以外、Flint の牡丹の句に一致するものを探し得ないと思われるのである。加えて、Flint の誤訳こそが、後に Flint の依存した翻訳の立証の一つの要件ともなうと思われる。

Flint の引用した最初の句に比して、第二の方は、容易に日本の俳句を指摘し得る。それは、俗に荒木田守武の句（実はそうではないのであるが）「落下枝にかへると見

れば胡蝶かな」である。この句は、「落花枝に帰らず、破鏡再び照らさず」の格言のパロディーであり、現在では決して評価の高い句ではないが、Flint と以外に Ezra Pound も引用しているし、Amy Lowell には、これに基く詩もあって、余程英米人に訴えるイメージを持った不思議な句とみえる。

Flint が何故この二つの句を *Sword and Blossom Poems* の書評に引用したか、推測する手立てもないが、これが唯一の Eiffel Tower グループの詩人達によって残された日本の俳句の引用文献なのである。そこで、一体誰の翻訳によって、Flint がこの二つの俳句を知ったかということになるが、その前に Flint の経歴を調べなければならない。

Frank Stuart Flint は、1885年12月19日（1960年2月29日没）にイギリスの Izlington で、行商人の子として生れ、小学校時代から床屋にアルバイトに行かねばならないほど貧乏な家庭に育った。13才で小学校を卒業した後も、生活の不安定さは変わらず、19才（1905年）でようやくタイピストとして市の職員になり、労働者の為の夜間学校に通い、そこでフランス語やラテン語を学んだ。大層語学的な才能に富んだ人で、後に独学でいくつかの外国語を習得している。特に、フランス語は、読み書きが自由自在なほど堪能で、この能力で新しいフランス文学の紹介や情報提供を1910年前後の英米文学界に行い、その点で Eiffel Tower グループや後の Imagist にとって重要な人物である。もっとも、彼は1920年までフランスへ行ったことはない。詩人としては、文学史に残る作品もないが、前に引用した *The New Age* 誌の書評からも分かる如く、熱心な自由詩（vers libre）の支持者であり、Imagism の全歴史を生きた唯一の詩人である点でも重要な人物である。

Flint の経歴の中で特にフランス語の力を念頭において、彼がどこから問題の俳句の知識を得たかという課題に戻ることになるが、その際に肝腎なことは、当の二つの俳句を翻訳した文献の有無の問題である。このことに関して、私は次章で全体的な欧米における俳句の翻訳史の概観をするので、当面の推論に必要な結論のみを述べると、次のようなことが言えるのである。即ち、Flint の引用した俳句の中、「落花枝に」の句の翻訳は、^{註12} 英独仏の訳が1908年の時点まで多数あるが、蕪村の「寂として」の句は、仏訳しか存在しないということである。この興味深い事実は、当然蕪村の句を訳したフランス訳こそが、恐らく Flint の俳句の情報源ではないかという推論を導くことになる。そして、この謎解きの鍵を握る人物こそ、1904年頃日本に住んだことのあるフランスの医師で且つ哲学者でもあった Paul-Louis Couchoud であり、その翻訳は1906年に *Les Lettres*（文学）という新しい雑誌に載った “Les Épigram-

mes lyriques du Japon (日本の抒情的エピグラム) であると考えられるのである。^{注13)}

このことをもう少し具体的に考察してみよう。*Les Lettres* は、1906年4月に創刊された新しい文学雑誌であるが、Couchoud はこの雑誌の4月と6・7・8月にわたって、上述の“Les Épigrammes lyrique du Japon”を掲載し、かなりの俳句の翻訳をしている。この解説付きの翻訳は、後に *Sages et Poètes d'Asie* (アジアの哲人と詩人) (1916年) に、もう少し増補されて、同名の表題のもとに再掲載されている。^{注14)} 私の入手した文献は、この再版されたものであるが、その中に果せるかな以下のような翻訳がある。

(1) Un pétale tombé

Remonte a sa branche :

Ah! c'est un papillon ! ARAKIDA MORITAKE 1472~1549

(2) Seule, dans la chamdre

Où il n'y plus personne,

Une pivoine. BUSON

(3) Et morte,

On la revoit vivante,

La pivoine. BUSON ^{注15)}

第一が「落花枝に」の訳、第二が「寂として」の訳、第三が念の為に載せたのだが、Couchoud の翻訳の中で、もう一つの牡丹に関する蕪村の句「ちりて後おもかげに立つばたん哉」の訳である。これらは、Flint の訳と全く同様に三行訳の無韻の訳であり、第二の「寂として」の訳における Flint の誤訳と全く一致する room に相当する chambre があり、両者の訳を比較しただけでも、Flint が Couchoud の翻訳より俳句を重訳したことは、疑う余地はない。だが、更にこの推論の根拠を示すと、Couchoud は俳句に相当する用語として「俳諧」という言葉を使用している点、並びに「落花枝に」の句の句読点が Flint のそれと共通していること等を挙げることが出来る。

以上の諸点から考えて、Flint の俳句の翻訳が、Couchoud のものから入ってきたことは、最早間違いないと思われるが、彼の“Les Épigrammes lyriques du Japon”であると断定するには、まだ不十分と言わねばならない。というのは、Couchoud は、1905年に *Au fil de l'eau* (細き流れに沿いて) という俳句に関する小冊子を出しているからである。同一の作者のものであるから、同じ翻訳が存在する可能性は高い。この *Au fil de l'eau* は現在フランスの国立図書館にすら保存されていない幻の

本であり、私も四方八方手を尽したが、手に入らなかったものである。だが、*Au fil de l'eau* が翻訳であるよりも、むしろ翻訳俳句を模倣した独自のフランス俳句であることが、フランスにおける日本文学の翻訳や影響を研究した William Leonard Schwartz の二つの論文 “Japan in French Poetry” (*P.M.L.A.*, 1925年) と *The Imaginative Interpretation of the Far East in Modern French Literature 1800~1925* (Paris, 1927) によって、知られるのである。それらによると、*Au fil de l'eau* は、彫刻家 Albert Poncin と画家 André Fanre と Couchoud^{注16)} が地中海で船旅びをしている間に作った、無韻律の三行詩である。

(They wrote haikai) on French subjects without any rules of prosody, in imitation, not of the Japanese originals, but of haikai in French prose translations. ^{注17)}

この Schwartz の言葉によって、その小冊子の内容は翻訳俳句を模倣した「フランスの主題」で書いたものということが分かる。彼によれば、全部で72作られたようであるが、彼の “Japan in French Poetry” に引用されている三つの例^{注18)}をみても、確かに日本の俳句の翻訳ではない。多分、Couchoud が自分の翻訳を他の二人の仲間に見せて、趣味的に作ったものと考えられ、事実私家版であった。この点から考えても、1920年までフランスへ行ったことのない Flint が、友人の土産にもらったならいざ知らず（ほとんどあり得ないことであるが）、これを手に入れる機会を仮定することは出来ない。そのみならず、1905年の時点では、Flint は19才であって、フランス語を学び始めて、余りにも時間が短かすぎる。そこで、私は、Couchoud という同一人物の俳句に関する書物とは言え、*Au fil de l'ean* を Flint の俳句の翻訳の情報源とは考えないのである。

従って、私は、「落花枝に」の句を訳し、西欧における唯一の蕪村の「寂として」の翻訳がある、Paul-Louis Couchoud の1906年の4月号と6・7・8月号の *Les Lettres* における “Les Épigrammes lyriques du Japon”こそが、F.S. Flint の俳句翻訳の源と断定するものである。このことは、必然的に Eiffel Tower グループつまり1909の Imagist の俳句の知識と翻訳が、Flint を媒介として入ってきたことを示しており、少なくとも新資料の出ない限り、現在最も確実な Eiffel Tower グループの俳句の移入経路と考えられるのである。

(≡)

1909年の Imagist の中で、F.S. Flint の俳句の翻訳は、Paul-Louis Couchoud の

ものに基づくことが結論的に言えるのであるが、それを更に確実なものにするには、どうしても Flint の引用した蕪村の「寂として」の句が、1908年7月以前に Couchoud の “Les Épigrammes lyriques du Japon” 以外にないことを実証しなければならない。その上、私共は日本文学研究家であったわけでもない Couchoud が、どのようにして俳句に興味を持ち、その知識を得たかという問題を当然予想しないわけにはいかない。これらの課題に答えることは、前章の考察の前提条件の正当性を証することになるし、補助的にその結論の正しさをも保証してくれることになるとと思われる。そこで上述の二点を主要な課題としながら、巨視的な角度から欧米における俳句の翻訳の流れを追跡調査し、Couchoud に至る極めて興味深い連鎖反応的な俳句翻訳史を概観するのである。

明治維新前後から、国際社会に登場し出した日本のことを紹介し、研究したのは、日本に來た外交官や日本の近代化の為に雇った外国人(御雇い外国人)であり、彼等こそ欧米の日本学を開拓し、文化の橋渡しをした人々である。だが、日本の政治的・社会的激動期にあっては、当然彼等の眼も日本の政治・社会・歴史・風俗等に向い、広く芸術と総称される領域は、浮世絵等の絵画の一部を除いて、一般に等閑視された。当時は、満足な欧米人向けの日本語のテキストすらないような状態であったのである。それでも、1866年(慶応2年)に F.V. Dickins の *Hyak nin is'shiu, or Stanzas by a century of poets* (London) という百人一首の翻訳が出ているし、1871年(明治4年)にはフランス人 Léon de Rosny の *Anthologie japonaise* に万葉集や古今集の一部が翻訳されているし、1874年にはイギリスの外交官 Ernest Satow が *The American Cyclopaedia* (New York: D. Appleton and Co.) という百科辞典の日本の項目で、当時としては、最も進んだ日本文学の概説をしている。Ernest Satow のものには、“haikai” という言葉が見えるが、それは「古今和歌集」の俳諧歌のことであって、所謂連歌之俳諧に触れた説明はどこにもない。

奇妙なことに、俳句に関する最初の文献は、少なくとも今まで私が調査した範囲内では、1877年に出たイギリスの外交官 W.G. Aston の *A Grammar of the Japanese Written Language* (1872年の増補改訂版) という日本語学習のテキストである。その中の第十章で、Prosody という章題のもとに日本の詩歌が簡単に説明されており、俳句が *hokku* として出おり、それは一つの完全な詩であると説明され、^{註10)} 作者名なしの三つの例が挙げられている。その中の一つは、其角の「夕立や田を見めぐりの神ならば」であり、残りの二つは作者は不明だが、「霧の海いづこへ富士はしづみぬる」と「人にこそ年はよりぬれ春の草」である。各々には、ローマ字と散文訳が付し

である。勿論、これが文学史的に利用された翻訳であるとは言えない。しかし、日本研究を志す人々は、当然皆日本語を学習しなければならないかったわけであるから、Aston のこの本は、当時頼りになる日本語のテキストとして多くの人々に読まれ、文学に興味ある人々も、まずここで日本の詩歌について、つまり俳句についての第一次的な情報を得た可能性は高いのである。このことは、後に Lafcadio Hearn も、1897年の *Gleaning in Buddha-Fields* で Aston の本に触れていることや、^{注20)} Chamberlain も1902年の “Bashō and the Japanese Poetical Epigram” で同じく言及している点からも、欧米人による俳句翻訳の嚆矢としての史的意義を無視し得ないと思われる。

俳句翻訳の第二番目も、同じく日本語関係の本であり、1873年に日本を訪れた Basil Hall Chamberlain の *A Handbook of Colloquial Japanese* (1889年) である。俳句に相当する用語は Hokku という語を使用している。特記すべき点は、加賀の千代女の「朝顔につるべとられてもらい水」の句が訳されていること、並びに芭蕉という名が初めて出ていることである。もっとも、芭蕉の句として引用されたものは、皆今日では理解に苦しむ誤伝の句ばかりである。その一つは、「一声は月がないたかほととぎす」であり、残りは其角の句（これも誤り）「赤とんぼはねをとったら唐辛子」という句を直して、「唐辛子はねをつけたら赤とんぼ」にしたという句である。言うまでもなく、顧慮に値しない翻訳ではあるが、Aston の場合と同様に、日本研究家の眼には触れたものと言える。

この二つの日本語のテキストの間に、Chamberlain の *Classical Poetry of the Japanese* (1880年) があるが、これは万葉集から能までの翻訳で、俳句に関する言及は全然ない。そのことは、当時の日本の国文学における和歌と俳句の文学的地位の関係、つまり和歌の俳句に対する優越の状態を反映していると言える。そして、この状態が俳句の翻訳や研究の進歩を遅らせたと言える。だから、1896年の Karl Florenz の *Dichtergrüsse aus dem Osten, Japanische Dichitungen* (東洋の日本の詩で詩的挨拶) という絵入りの翻訳集は、万葉集や古今集の歌が中心であって、俳句に関するものは Arakita Moritake と誤読した「落花枝に」の句と Kyorai (去来) や Hokushi (北枝) の作者名のものがあるに過ぎない。だが、この本こそ、「落花枝に」の句を欧米人が訳した最初であり、^{注21)} 同年に Arthur Lloyd によって、*Poetical Greeting from the Far East* として、直ぐ英訳されている。この二つのもので注意すべき点は、Flint が書評した *Sword and Blossom Poems* と同じ長谷川武次郎によって出版されていることである。装幀も、欧米人のエキゾチズムを刺戟するに足る絵入りである。だが、Florenz と Lloyd が Japan Society の会員であったことを考慮し

ても、俳句翻訳史においては傍系と考えるべきと思われる。

これに対して、恐らく Lafcadio Hearn は、俳句翻訳史の上で、今まで述べてきたものとは異なった意義を持っている。Hearn は、1890年に来日し、1894年には最初の日本に関する著作 *Glimpses of Unfamiliar Japan* を書いている。だが、俳句の翻訳が大谷正信というよき助手を得て、彼の著作に現われるのは、1898年の *Exotics and Retrospectives* をもって始まる。以後、1904年に他界するまで、ほぼ毎年その著作には、俳句の翻訳が載っている。その著作に関しては、参考資料の俳句翻訳の略年表を見て頂くことにして、ここで一括して、その翻訳の基本的な特徴を述べることにする。

まず彼は、1898年の *Exotics and Retrospectives* の第5章で Frog の題のもとに、今日欧米で最もよく知られた俳句の一つ、芭蕉の「古池や蛙とび込む水の音」^{注22)} を翻訳した最初の人である。その他に、1904年の *Kwaidan* で「落花枝に」の句を、「蝶」を主題とした章で翻訳している。

When I saw the fallen flower return to the branch—lo! it was only a butterfly! ^{注23)}

これには、「落花枝に帰らず、破鏡再び照らさず」の注釈が付いている。上の二つのことから了解し得るが如く、Hearn の翻訳は、自分が文学的又は心情的な興味を抱く事物又は主題に従って、選句をしており、句も古今にわたっている。従って、上述の「落花枝に」の句に注釈が付けられ、又俳句の詩形式に関しても5-7-5のような簡単な説明はされているが、所謂俳句を客観的に紹介しようとする意図で翻訳はなされていない。あくまでも、文学者（作家）の眼と心よりなされており、その意味では、極めてユニークなものと言える。用語は *hokku* で終始一貫しており、助手大谷正信のお蔭であろうが、当代のものにまで翻訳が及んでいる点が特徴的である。それ故に、当時として、彼は欧米人の中でも最も多く俳句を翻訳した人であり、その翻訳総数は約194句にのぼる。もっとも、その中に蕪村の牡丹の句がないことは言うまでもない。俳句翻訳史の流れの中で、Hearn の位置を考える場合に、もう一つ見逃がすことの出来ない点は、恐らく後に述べる Chamberlain の1902年の俳句研究の重要な動因又は刺戟になっているのではないかということである。周知のように、Hearn と Chamberlain の交流は、1890年に彼が来日して以来続いており、1895年に東京帝国大学英文学部の講師になったのも、Chamberlain の力に負っている。而して、生来どちらかと言えば学者的な Chamberlain をして、本格的に俳句の研究と翻訳をしてみようという動機を起させた一つに、Hearn の俳句翻訳はなっていると思われる。それに加えて、前に述べた Paul-Louis Couchoud も又、Hearn の著作は読んでお

り、注²⁴⁾ その史的位置は高いと言える。

Hearn の後には、1899年の W.G. Aston の *A History of Japanese Literature* (New York: D. Appleton and Co.) における俳句の翻訳がくる。翻訳の上で特記すべきことは、用語が俳諧を使用していること、三行訳（これは欧米人の翻訳で初めての形式）であること、荒木田守武の名のもとに「落花枝に」の句があること、芭蕉の句が14句訳出（その中に「古池」の句あり。）されていること等である。念の為に、「落花枝に」の訳を掲げる。

“Thought I, the fallen flowers

Are returning to their branch;

But lo! they were butterflies.” 注²⁵⁾

恐らく、蝶を複数に訳した珍しい例と言える。この本には、1889年の Chamberlain の本が、千代女の「朝顔に」の句との関連で言及されている。元来文学史であるので、俳句の翻訳は、総数にして18句に過ぎず、日本文学史としては、当時欧米の研究の中で最も纏ったものと言えるが、恐らく俳句翻訳史の上では、その意義に限界があると思われる。

Hearn が続々と俳句を翻訳し、Aston が「日本文学史」を書いてまもなく、1902年の *Transactions of the Asiatic Society of Japan* に、B.H. Chamberlain が “Bashō and the Japanese Poetical Epigram” を発表する。これこそ、欧米人の手になる最初の本格的な俳句研究と翻訳である。用語は Hokku、そして括弧に Haiku と Haikai の名称が付記され、その概念の区別も、俳句の歴史を説明する過程でなされている。Chamberlain は、三つの名称の歴史的な区別を当時の国文学の研究や俳句革新の状況から知っており、その理解に立って発句という用語を主として使用したものと思われる。翻訳総数は、205句（他に一句説明上の引用あり）、ローマ字による日本語、二行訳、更に詩的意味又は解釈等が加えてある。作者は、名前の付してある句だけで宗祇以下一茶まで59名あり、他に解説用の引用句47句には、作者名はないが、勿論重複する俳人の作は多い（例えば千代女の「朝顔」の句）。芭蕉は、最も多く34句（これは、誤伝の句を一つ除いたもの、但し、作者名なしの芭蕉の句11句を含む。「古池」の句あり。）、蕪村は第二番目に多く、13句（作者名のあるもの、他になし。）訳されている。但し、牡丹の句は一句もない。勿論、守武は4句訳され、「落花枝に」の句はある。

Fall'n flow'r returning to the branch,—

Behold! it is a butterfly.

I.e. For a moment I fancied it to be a fallen petal flying back, by some

miracle, to its native branch. But lo! it was a butterfly. 注²⁶⁾

実に丁寧な、いささか詩的感興を殺ぎかねない説明付きである。しかし、このような傾向は、逆にこの研究の厳密さを生むことにもなっており、和歌から説き起した俳諧の歴史とその詩形式や季節の意義に関する解説には、今日でも認めるに足るものがある。特に、芭蕉については、今日から見れば見方や知識に多くの疑問点を見出し得るにしても、簡単な伝記的説明や「不易流行」のような俳論の説明まであって、俳句翻訳史の中で最初の本格的な俳句の研究と翻訳と規定して誤りはないものと思われる。

だが、俳句翻訳史上もう一つ特記しなければならないことは、俳句(発句)に Epigram という名称を与えた最初の欧米人ということである。

Their native name Hokku (also Haiku and Haikai), which, in default of a better equivalent, I venture to translate by “Epigram,” using that term, not in the modern sense of a pointed saying,—un bon mot de deux rimes orné, as Boileau has it,—but in its earlier acceptation, as denoting any little piece of verse that expresses a delicate or ingenious thought. 注²⁷⁾

この研究論文の載った *Transactions of the Asiatic Society of Japan* の流布の範囲は、その雑誌の性格上、一般的な意味では限られたものであるが、Chamberlain の研究は、特定の人々にはよく読まれ、それが又第二次的な伝播者又は媒介者の俳句の知識の土台となって、啓蒙と宣伝の役を果たした人々に受け継がれていった波紋の原点と言える。そして、その訳の当否は別にして、Epigram という俳句に対する用語の反響は、直ぐに現われたのである。

この反響こそ、実は Paul-Louis Couchoud その人であり、彼のフランスへの俳句の紹介と翻訳である。この反響を起す歴史の不思議な流れを追跡する前に、再び Paul-Louis Couchoud について述べねばならない。Couchoud は1879年生まれで、まず精神科の医者として世に出たが、やがて哲学や宗教に興味を持ち、1902年にはベルギーの哲学者スピノザに関する著書を出している。友人の文学者 Anatole France によれば、彼は「医者たるより現代のクレイオー（ギリシャの歴史を司る女神）たらんと欲し、人類の全世代に共通の基盤となる道德思想史を考える」注²⁸⁾ ようになり、キリスト教の起源の研究や世界の他の主要な宗教の研究をし、やがて哲学の教授になっている。彼は、若い頃から、世界各地を旅行し、その旅の一つが当時としてはまだ珍しい東洋の旅であった。日本が最初から旅行の目的地であったかどうかは不明であるが、来日しており、後に述べる如くかなり旅行者としては長い期間滞在した。しかし、彼が俳句を知るようになったのは、来日以前と思われる。その情報のきっかけ

は、実は同じフランス人の書いた Chamberlain の “Bashō and the the Japanese Poetical Epigram” に関する書評なのである。それは、次のような過程を経たものと推測される。

当時のことであるから、勿論船で東南アジアにやって来た Couchoud は、多分当時フランスの植民地であったインドシナに立ち寄り、そこで出版されていた1903年の *Bulletin l'Ecole Française d'Extreme-Orient* (東南アジアフランス大学紀要) の Claude-Eugene Maitre の Chamberlain の研究論文に関する書評を読んだものと思われる。そのことは、Couchoud 自身の書いた次の言葉によって、確実と思われる。

J'ai emprunté à M. Chamberlain les renseignements historiques sur Bashō et quelques-uns des plus jolis exemples. Je dois beaucoup aussi à l'érudition de mon ami M. Cl. E. Maitre qui a donné une substantielle notice sur les haïkai dans le Bulletin de l'École française d'Extrême Orient. [私は、チェンバレン氏から、芭蕉に関する歴史的記述と氏が引用した例句の中で、最も魅力的なもののいくつかを借用させて頂いた。又、「東南アジア大学紀要」で、俳諧に関する内容の充実した小論を出している友人 C.-E. メーテル氏の博識に感謝を申し上げたい。] 註²⁹⁾ 当時ハノイには、東南アジアフランス大学があり、そこで1901年より発行されていた東洋学の紀要が、前述の「東南アジアフランス大学紀要」である。

Maitre の書評で俳句に興味に抱いた Couchoud は、恐らく中国経由で来日したものと考えられる。その来日の正確な日時と滞在期間は不明だが、1903年の夏頃は東南アジアフランス大学の友人と中国を旅行しているので、恐らく1903年の秋から暮にかけて、来日したのではないかと推測される。そして、*Sages et Poètes d'Asie* の *Le Japon aux Armes* (戦時下の日本) という日露戦争当時の日本の様子を書いた文から、1904年2月から4月にかけて東京にいたことは確実であるし、京都を初めとしてかなり日本各地を旅行しているので、当時の交通事情を勘案しながら、1905年にはフランスへ帰国している事実から逆算すると、恐らく半年から10ヶ月位日本で生活したのではないかと考えられる。この程度の滞在期間では、たとえ Couchoud が語学的才能に富み、日本で生活していたという条件を考慮しても、俳句を読み、それを自からの手で完全に翻訳し得るほどにまで、未知の日本語を習得したとは考え難い。この他にも、Couchoud の日本語の力を暗示することとして、私は彼の日本に関する著作が皆滞在中のものであることを指摘したい。従って、私は、前に引用した Couchoud の Chamberlain と C.-E. Maitre に対する感謝の辞とを考え合わせて、Couchoud の翻訳と研究に助手的な人物を想定せずにはいられない。このことを念頭において、

“Les Épigrammes lyriques du Japon” の特徴を調べてみよう。

まずこの翻訳では、俳句の用語は *haikai* で統一され、短歌に対しては *Uta* という言葉を当てている。第二に、ローマ字の日本語が全然付記されていない。第三に、三行訳の無韻の訳である。第四に、作者名は大部分に付記されており、40数名にわたる。第五に、何によりも重要な点であるが、Couchoud のエピグラムの概念は、Chamberlain から借用したものであるが、それと少し異なり、又俳句の絵画性と瞬間性が強調されていることである。特に、翻訳した俳句百数十のうち、蕪村の句は60句以上に達するが、それに対し芭蕉の句は、10句に満たないことである。前章で述べたように、蕪村の句には、二句牡丹の句があるが、それ以外に牡丹の句はどの作者にも存在しない。このことは、Couchoud の日本滞在の時点が、子規に始まる俳句革新運動の発展と浸透期（子規は明治35年（1902）4月に死んでいるが）と平行している点から考えて、Couchoud の翻訳の背後にこの日本の俳壇の状況との因果関係を予想しないわけにはいかない。周知のように、子規を中心とする新派は写生論を俳句の中心にすると同時に、蕪村再評価を行った。Couchoud が “Les Épigrammes lyriques du Japon” の中で日本を旅行している時に、「自分達の旅行の印象をスケッチと俳諧でしるした若い画家と旅の道連れになった」^{註30)} と記しているので、この人物が誰であるかは不明だが、この日本人から新派の俳句や蕪村のことを聞いたのかもしれない。特に、俳句の歴史や芭蕉の記述に関しては、誤謬まで Chamberlain の “Bashō and the Japanese Poetical Epigram” の記述をほとんど借用^{註31)} している Couchoud が、何故重点的に蕪村の句を集めたかという理由は、日本俳壇の新派の傾向を抜きにしては考えられない。

だが、このことは、自力で完全に俳句の翻訳をしたとは考えられない Couchoud の助力者の一人と考えられる C.-E. Maitre との関連も考えねばならない。当初私は C.-E. Maitre にも俳句の翻訳が存在するのではないかと考え、追跡調査したが、1905年以前の彼の日本関係の著作は、*Bulletin l'Ecole Française d'Extrême-Orient* の書評等を除いて、1901年の *L'Art du Yamato*（大和の美術）のみである。しかし、彼が日本の美術を研究していたということは、蕪村の句が絵画的性格を濃厚に持っているという点から考えて、Couchoud の翻訳の蕪村の句の多さに部分的に反映しているのではないと思われるのである。Couchoud が Maitre に翻訳上何らかの形で強く助けを得ていることは、前に引用した文章で明瞭であるが、更に Maitre の Chamberlain のものに対する書評で使われている用語が俳諧である点や三行訳^{註32)} である点で Chamberlain とは異なり、逆にそれは全て Couchoud のものと一致する点か

ら考えて、Maitre の助力者の比重はかなり高かったものと言える。両者の俳句翻訳におけるより深い具体的な関係は、現在の文献から、これ以上知るよしもないが、少なくとも、Couchoud は日本の俳句を翻訳するにあたって、Maitre の助力を得たことは間違いない。特に、Chamberlain の “Bashō and the Japanese Poetical Epigram” とは異なる訳し方や蕪村の句を翻訳する際に、Maitre の寄与があったものと思われる。

とにかく、Couchoud は、俳句を翻訳し、初めてフランスにそれを紹介した最初の人物である。そして、前章で述べたように帰国後1905年に私家版で友人の画家や彫刻家と俳句の小冊子を出し、1906年に *Les Lettres* に “Les Épigrammes lyriques du Japon” を発表した。これが反響を呼んで、1906年には、その編集者であった Fernand Gregh が *Revue de Paris* の11月号で、12の四行詩 “Quatrains à la façon des Haikai japonais” (日本の俳諧のフランス語による四行詩) を書き、1908年には、A. Neuville が *Haïkaï et Tankas, Épigrammes à la Japonaise* (俳諧と短歌—日本のエピグラム) を出している。^{注33)} しかし、これらの二つのフランス人による俳句関係の著作は、前者は創作的な韻のある四行詩である点で、Flint の俳句とは結びつかず、後者も又次に掲げる「落花枝に」の翻訳で、Flint に結びつかないと断言し得る。

Tombé dans le sillon,

Le pétal d'une fleur blanche.

Se ranime soudain, et remonte à sa branche.....

Ah ! c'est un papillon ! ^{注34)}

以上のようにして、1902年の Chamberlain の “Bashō and the Japanese Poetical Epigram” の影響は、Couchoud を経てフランスに及び、一方でこれは又 Karl Florenz の *Geschichte der japanischen Litteratur* (日本文学史) の中の “Des japanische Epigramm” (日本のエピグラム) に結びついている。ここで、Florenz は70以上の俳句を翻訳しているが、特に新しいことと言えば、新派の「ホトトギス」に関する記述のあることぐらいである。訳は三行訳で、蕪村の句は二句（それも Chamberlain のものからの借用と思われる）があるが、牡丹の句はない。況んや、Imagist の 眼に触れた可能性はないが、ドイツにおける俳句の紹介には、寄与したであろう。

1908年代の時点までの西欧の俳句翻訳の主要な流れと連鎖的な反応を概観してきたわけであるが、すでに結論は明らかな如く蕪村の「寂として」の句は、Couchoud の “Les Épigrammes lyriques du Japon” 以外にない。そして、1902年の B.H. Chamberlain の “Bashō and the Japanese Poetical Epigram” の俳句翻訳史上に果した重要な地位も、これ又贅言を費すまでもなからう。

(四)

1909年の Imagist つまり Eiffel Tower グループの詩人の中で、Flint の俳句の翻訳と知識は、前章までの調査と推論から最早フランス経由であることは動かすことが出来ないが、それが彼等が俳句を知り、“amusement”として俳句を書く唯一の源泉であり、動因であると考えることには、疑問が残る。特に、グループの誰一人として日本文学の素養を持っていたとは言えないのであるから、何故俳句のようなものに関心を持ったかという受容の動機もこれ又問題である。そこで、私は、Flint 含めた Eiffel Tower グループの詩人が俳句に興味を持ち、それを書くには何か別の条件が存在すると考え、情況証拠を使って、もう一度英米の文献の中で俳句紹介の発端になった二三の文献と Imagist の関係を考察しなければならない。

すでに再三再四述べているように、フランス語の堪能な Flint は、Couchoud の“Les Épigrammes lyriques du Japon”を情報源としているが、一つだけ不思議な用語の相違が両者にある。それは、Flint が短歌に対して専ら Tanka で終始一貫しているのに、Couchoud のものでは、勿論付随的に二三度使われているに過ぎないのであるが、Uta (歌) と出ており、Flint の日本に関する知識が決してフランスの日本文学研究のみでないことを示唆している。例えば、Flint は、前に引用した *Sword and Blossom Poems* のような日本関係のものを書評しているのである。従って、Flint に関してすら、日本文学の知識をフランスからのみ得たとは言えず、Eiffel Tower グループ全体の詩人に何か日本のことに興味を持たせ、又日本文学に関心を抱かせる別の条件が英国社会自体にあったと考えざるを得ない。

まず当時の日英の政治的、歴史的関係を考えると、1902年に日英同盟が締結されている。このことは、日英の交友関係を生み出す土台となったが、更により重要な歴史的・政治的出来事は、1904年2月から1905年9月にかけての日露戦争であり、この戦争に日本が勝ったということである。この歴史的な出来事は、当時の英国人に広く日本の存在を知らせ、関心を呼び起す原因となった。私は、*Times Literary Supplement* の1905年から7年末までの日本関係の書物の広告と書評を追跡調査した結果から推定して、当時の英国のジャーナリズムや出版界に強い日本への関心があったという事実を指摘し得ると、考えるのである(資料2参照)。勿論、その大半は、日露戦争に関する時事的又は政治的なものであるが、当時の大手出版会社がほとんど全て日本に関する書物を出版し、その広告と書評が量的に極めて多いという現象が了解し得られると思われる。しかも、当時の英国世論は、極東の英国の外交政策の観点を反映し

て、親日的であった。従って、私は Eiffel Tower グループを形成する以前に、その詩人達がまず日本への一般的な好奇心と興味を持ち得る社会的環境と雰囲気の中に生活しており、このような環境から、彼等が日本文学や俳句に、もし手近かに情報源があれば、まず向かったものと考えるのである。このような歴史的事情を考慮せずして、全然知りもしない日本文学に、まして俳句に興味を抱くとは考えられず、まず日露戦争という政治的・歴史的出来事と、これに付随して起った英国社会のジャーナリズムや出版界の一種の日本ブームを、Imagist 達のグループの日本文学、そして俳句への興味の前提条件と考えるのである。

このような前提条件としての、一種の英国社会の日本ブームは、所謂日本在住の日本文学研究家、例えば W.G. Aston, B.H. Chamberlain, L. Hearn 等ほどに日本文化や文学に精通してはいないが、これらの専門家の研究や翻訳を通して、又は短期来日を通して、時には在英日本人を通して、多少は日本文学の知識を持っているといった第二次的な情報提供者又は媒介者を当然ジャーナリズムや出版界が必要した筈であり、そのような人々の書いた日本の詩に関するものは、日本の詩の紹介や宣伝の役割を果たしたと推定し得るのである。そのような日本文学の紹介と啓蒙を兼ねたものを、今俳句に限って調べると、1905年4月の *The Fortnightly Review* の J.C. Balet と L. Defrance の “Japanese Poetry” と、同年の在英日本人 Y. Okakura (岡倉由三郎) の *The Japanese Spirit* の中の俳句に関する説明の部分などを挙げる事が出来る。殊に、前者は *The Fortnightly Review* が当時の英国の知識人を読者層とする有力な総合雑誌であり、その流布の度合いから考えて、必らずや1909年の Eiffel Tower グループの誰かの眼に触れているものと思われる。勿論、それは資料的に可能性の域を出ないが、Flint が自分達の求めている「自由詩が日本のものに精神において似ている」と言う時、Japanese Poetry 中の「(日本の詩には) 強弱のアクセントや韻がない」という言葉を想起させるし、日本人は身分の低いものさえ「皆詩人である」という Flint の *The New Age* の書評中の言葉は、これ又この記事に近い表現が出てくるのである^{註35)}。用語も、haikai or hokku と出ており、訳も日本語の付記された三行訳であり、短歌の用語は Tanka であって、Flint のものと抵触しないように思われる。加えて、この記事には、詩法の簡単な説明もあるので、何らかの形で、Eiffel Tower グループの詩人に関連しているのではないかと思われる。但し、余りに俳句の翻訳が少なすぎ^{註36)}(4句)、あくまでも日本の俳句に興味を抱かせる誘因と「遊び」として俳句を書く際の一助になったというのが妥当かもしれない。

第二に挙げた *The Japanese Spirit* は、在英日本人の手になる、日本の精神文化

を紹介した本である。岡倉由三郎は、岡倉天心の弟であり、後に日本の英語教育に重きをなした人であるが、あくまでも日本の精神文化の紹介が中心であって、文学的なものとしての意義は少ない。唯、この本は当時の有力出版社 Archibald Constable から出ていて、宣伝にも力を入れていた本であるので、流布の範囲は、日本ブームにのって、相当あったのではないかと考えられる。もしそうであれば、Eiffel Tower グループの誰かに読まれ、俳句の紹介的な役割又は日本への一般的な興味を喚起する役割を果たしたかもしれない。

この他に、Hearn の著作は、TLS に広告も出ているし、書評もあるので、読まれた可能性は、かなり考えられるが、少なくとも「amusement」として俳句を書く上で、どの程度寄与したかは即断出来ない。この他にも可能性という点では、*Sword and Blossom Poems* のような翻訳が英国に渡っているのであるから、W.G. Aston や B.H. Chamberlain のものも、同国人のものだけに、当時の英国社会の日本ブームの中では、否定し得ない。このような仮定は、ロンドンの日本協会の活動にまで及ぶべきだろうが、全て実証するに足る根拠は何もない。

しかし、私がここで述べたいのは、Imagist の俳句との結びつきに、極めて非文学的な歴史的要素を無視しえず、当時の英国のジャーナリズムや出版界の日本ブームこそが、彼等の俳句の受容の不可欠な要件であるということである。特に、そのような歴史的状況の中では、“The Japanese Poetry” のような紹介記事は、Eiffel Tower グループの中の誰れかに、日本の俳句や短歌への興味を抱かせ、その情報を第一次的に提供した可能性は高い。それは、あくまでも情況証拠からの推定の域を出ないが、Eiffel Tower グループの連中が、「遊び」としてであれ、俳句を書く前提条件であり、又誘因となったものと思われる。

(五)

本論の考察の結論は、今までの論究の過程から明らかとは思われるが、それを補足しながら要約すると同時に、俳句が Imagist に関心を持たれ、影響を与えた意義を述べて、本論を終りたい。

まず1909年の Imagist つまり Eiffel Tower グループの俳句の移入経路は、少なくとも F.S. Flint の場合はフランスの Paul-Louis Couchoud の1906年の“*Les Épigrammes lyriques du Japon*” (*Les Lettres*) である。これは、資料的に最早動かし難い唯一の実証可能な移入経路と現在の段階では、断定し得る。しかし、Couchoud に至る過程にあっては、W.G. Aston に始まる英米人の翻訳が存在し、特に B.H. Chamberlain

の1902年の“Bashō and the Japanese Poetical Epigram” (*Transactions of The Asiatic Society of Japan*) は、Couchoud に俳句翻訳をさせる上で決定的な役割を演じているということである。この関係は、俳句が英米の文学の世界に受容されるに当って、実に不思議な運命を辿ったことを示している。

資料的に実証し得る1909年の Imagist の俳句の移入経路の結論は、以上の二点で十分なのであるが、私は単純なフランス経由の俳句移入説には同意しない。その理由は、1904年から1905年にかけての日露戦争という政治的・歴史的環境が、英国の社会やジャーナリズムの眼を日本に向けさせ、一種の日本ブームを生み、それが Imagist に日本の俳句へ興味を持たせ、受容させる不可欠な前提条件と考えるからである。加えて、そのような渦中で書かれた1905年の *The Fortnightly Review* の“Japanese Poetry”のような紹介記事は、少なくとも第一次的に読まれた可能性が高いものと思えるのである。勿論、それは情況証拠からの推測の域を出ないが、俳句が Imagist に受け容れられる 不可欠な要件と考えるのである。私は、比較文学の影響関係において、偶然の出会いの確率を認めるものではあるが、それは単に偶々影響力を及ぼし得る文学がそこに存在するから、その力が作用するといった一方的で単純な方向でのみ考えることは出来ない。影響関係は基本的に影響を与える側と受容する側の条件の相関関係より成り立ち、特に未知の日本の俳句のような文学が受け容れられる際には、受容する側の種々な条件や状態こそが影響の有無を決める重要な要素だからである。その受け容れる側の条件を、考察の中心である Imagist のグループにみる時、一つの大きな条件は、当時の英国社会全体の日本への関心であり、二つには、文学的な面での当時の自国の文学（詩）への不満であったと言えるように思われる。資料的に現在の階段では、Flint 以外にも T.E. Hulme が「小さな絵画的詩を作った」^{注37)}ことは判明しているが、その証言すら Flint のものであり、Eiffel Tower グループと俳句を結びつける証拠は、皆 Flint より出ている。このこと自体は、Eiffel Tower グループに俳句が知られ、「遊び」として書かれるに際しての彼の役割の重要性を示すものと言え、延いてはフランス人 Couchoud の“Les Épigrommes lyriques du Japon”の史的意義を保証するものではあるが、その彼ですら、この一つの情報源だけで俳句を知り、「遊び」として書く気持になったかどうかは、疑問と言わねばならない。実際に日本語も出来ず、日本文学の知識も皆無であって、とにかく「書く」という行為が外国の翻訳を唯一の頼りとして行うということは、可能性として否定はしないが、私はこれを採らない。Flint は、*Sword and Blossom Poems* のような英訳の日本の本を書評しているのであるから、実証することは難しいのであるが、何か日本に又は

日本文学に関する知識を、フランスのもので知る前に読んでいたように思われる。特に、当時の一種の日本ブームの中で出た容易に購入し得る前述の“Japanese Poetry”のような紹介記事等は、Flint でなくとも、Eiffel Tower グループの参加者の一人ぐらいいは読んだであろうという可能性を私は想定するのである。そのようであってこそ、「遊び」として俳句を書くという提案がグループとして承認されると考えるのである。従って、資料的に実証し得る Eiffel Tower グループに至る俳句の移入経路は、Flint 経由のフランス人 Couchoud のものであると、私は断定するが、Flint を含むグループ全体の詩人における俳句の第一次的な情報源は、当時の英国社会に存在した一種の日本ブームの渦中で書かれた“Japanese Poetry”のような俳句の紹介記事等が積極的な可能性を持ったものとして考えられると、結論付けるものである。

今日では、1909年の Imagist の「遊び」として書いた俳句は、残っていない。「遊び」として書き捨てられた点で、連歌之俳諧の初期に通じるものがあり、興味深い。しかし、彼等が日本の俳句に興味を持ち、殊にその視覚性に富んだイメージと凝縮度を生む短詩形式に文学的可能性を認めたことは、1909年以降の Imagist、例えば Ezra Pound や Amy Lowell 等に受け継がれていくのである。それは、俳句が二十世紀初頭の現代詩の発展の流れに、影響力においてはフランスの後期象徴主義の詩に遠く及ばないにしても、結びついたことを意味し、今日の英米での俳句の隆盛の源泉となったものである。恐らく、今日の英米の詩人で俳句を知らないものはいないであろう。Aldous Huxley は、*Literature and Science* で、芭蕉の「静かさや岩にしみいる蟬の声」を激賞しているし、W.H. Auden も又、俳句を翻訳で読むことを勧めている。アメリカでは、Beat Generation の詩人 Allen Ginsberg や Gary Snyder、彼等に近い Kenneth Rexroth 等に俳句は浸透している。加えて、英語の俳句が多数創作され、学校教育にまで俳句は応用されているのである。明治以来、日本は常に欧米の文学より影響を受ける側に立つことが多かったが、その中で俳句のみが国際的な文学として、影響を与えているのである。これは、勿論種々な歴史的要因や俳句自体の持つ文学的な活力にもよるが、それと同時に Imagism と Imagist の詩人に俳句が発見され、影響を及ぼしたという英米文学の中に出発点を持ったことによる。たとえ、偶然的、小さな出会いだったとは言え、あたかも古池に跳びこんだ蛙の波紋がいつしか大海に広がったような Imagist と俳句の出会いは、少なくとも東西文学の橋渡しの重要な土台を築いたと思われる、その文学史的意義は、高いと言うことができる。

注 1) T.S. Eliot, *To Criticize the Critic* (New York: The Noonday Press, 1965), p.58.
Delivered at Washington University, St Louis, Missouri, 9 June 1953.

- 2) J.B. Harmer, *Victory in Limbo: A History of Imagism 1908~1917* (London: Secker & Warburg, 1975), p.18.
- 3) Ibid., p. 32~33
- 4) Ezra Pound が *Ripostes* (1912) の appendix で、T.E. Hulme の詩を載せ、この中で初めてフランス語で Imagisme として、Imagism を命名した。
- 5) F.S. Flint, "The History of Imagism", *The Egoist* II (May 1, 1915), p.70.
- 6) Earl Miner, "Pound, Haiku and the Image," *The Hudson Review*, IX (Winter, 1956~1957), p. 573.
- 7) F.S. Flint, "Book of the Week, Recent Verse", *The New Age*, 722 (11 July, 1908), p. 212~13. この資料は、佐藤和夫先生より拝借した。
- 8) 佐藤和夫『『剣と華』雑考』、英語文学世界 (1975年8月), p. 2~5.
- 9) *Sword & Blossom Poems*, Translated by Shotaro Kimura and Charlotte M.A. Peake, (Tokyo: T. Hasegawa, 1907). Quoted from Post Scriptum in this book.
- 10) この句を蕪村の「寂として」の句であると最初に指摘したのは、町野静雄氏である。
(「英米における『落花枝に帰る』の句」、青山学院短期大学紀要24号 ((1970年11月)), p. 69.
- 11) 正岡子規「俳人蕪村」子規全集第四巻、(講談社、昭和50年)、p. 627~8.
- 12) この点に関しては、佐藤和夫『『落花枝にかへると見れば胡蝶哉』翻訳考』(早稲田人文自然科学研究第13号、昭和51年2月)、p. 21~37. に詳しい。
- 13) この結論は、J.B. Harmer の *Victory in Limbo* のそれと、偶然にも同一である。同書129頁~130頁参照。J.B. Harmer の著書には、Imagism の記述やその他の点で啓発されることが少なくなかったが、Harmer と私の推論の過程や結論が同一でないことは、本論が証明していると思われる。しかし、結果的に Flint の俳句の Source に関しては、彼の研究を追認することになったことを認めるものである。
- 14) William Leonard Schwartz, "Japan in Poetry". *P.M.L.A.* XL (1925), p. 442~445.
- 15) Paul-Louis Couhoud, *Sages et Poètes d'Asie* (Paris: Calmann-Lévy, 1916), p. 62 & p.68
- 16) Julien Vocance, *Le Livre des Haï-kai* (Paris: Société Française d'Éditions littéraires et techniques, 1937), p. 7.
- 17) William Leonard Schwartz, *The Imaginative Interpretation of the Far East in Modern French Literature 1800~1925* (Paris, 1927), p. 160.
- 18) Schwartz, "Japan in Poetry", p. 442.
一例を挙げる。
Les joncs même tombent de sommeil,
Je rôti délicieusement.
Midi
(この詩は the Imaginative Interpretation の
160 ページにも引用されている。)
- 19) W.G. Aston, *A Grammar of the Japanese Written Language* (London: Trübner, Yokohama: Lane, Crawford & Co., 1877), p. 203
- 20) Lafcadio Hearn, *Gleaning in Buddha-Fields*, (1897; rpt. Tokyo: Tuttle, 1971), p. 31
- 21) Karl Florenz, *Dichtergrüsse aus dem Osten Japanische Dichtungen*, (Tokyo: T. Hasegawa, 1896), p. 41.

「落花枝に」の句の訳は、次の通りである。

Augentäuschung

Wie ? schwebt die Blüte, die eben fiel,
Schon wieder zum Zweig am Baum zurück?
Das wäre fürwahr ein seltsam Ding !
Ich näherte mich und schärfte den Blick—
Da fand ich—es war nur ein Schmetterling.

この訳が「落花枝に」の最初の訳と指摘されたのは、佐藤和夫先生である。

- 22) Lafcadio Hearn, *Exotics and Retrospectives*, (1898; rpt. Tokyo: Tuttle, 1971), p. 164.
- 23) Lafcadio Hearn, *Kwaidan*, (1904; rpt. Tokyo: Tuttle, 1971), p. 189.
- 24) Couchoud, *Sages et Poètes d'Asie*, p. 15
- 25) W.G. Aston, *A History of Japanese Literature*, (New York: D. Appleton, 1899), p. 290.
- 26) B.H. Chamberlain, "Bashō and the Japanese Poetical Epigram", *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, XXX, (1902), p. 312.
- 27) Ibid., p. 243.
- 28) Paul-Louis Couchoud, *Japanese Impressions*; tr. by Frances Rumsey, with a preface by Anatole France, (London: John Lane, 1920), p. vii~viii.
- 29) Couchoud, *Sages et Poètes d'Asie*, p. 54.
- 30) Ibid., p. 28.
- 31) Ibid., p. 124.
- 32) C.-E. Maitre, "Japon. Basil Hall Chamberlain.—Bashō and the Japanese Poetical Epigram", *Bulletin l'Ecole Française d'Extrême-Orient*, Tome III (1903), p. 723~29.
- 33) Schwartz, "Japan in French Poetry", p. 442~3.
- 34) Ibid., p. 443.
- 35) J.C. Balet & L. Defrance, "Japanese Poetry", *The Fortnightly Review* (July, 1905), p. 640~53.
- 36) この翻訳のうち、二つは Chamberlain の *A Handbook of Colloquial Japanese* からのものと思われる。
- 37) F.S. Flint, 'Ripostes of Ezra Pound', *Poetry and Drama*, 1 (March 1913), p. 61.

本論は、昭和52年3月の日本比較文学会東京支部例会において発表したものに基く。又、早稲田大学の佐藤和夫先生には、この研究をなすにあたって多くの学恩を受けており、感謝を申し上げるしだいである。

資料 I 欧米（英仏独）の俳句翻訳又は紹介のある文献の略年表

	俳句翻訳又は紹介文献	日本文学又は日本関係の主要文献
1872		Léon de Rosny, <i>Anthologie japonaise</i>
1877	W.G. Aston, <i>A Grammar of the Japanese Written Language</i>	
1880		B.H. Chamberlain, <i>Classical Poetry of the Japanese</i>
1889	B.H. Chamberlain, <i>A Handbook of Colloquial Japanese</i>	
1894		L. Hearn, <i>Glimpses of Unfamiliar Japan</i>
1895		L. Hearn, <i>Out of the East</i>
1896	K. Florenz, <i>Dichtergrüsse aus dem Osten, Japanische Dichtungen</i> A. Lloyd, <i>Poetical Greetings from the Far East</i>	L. Hearn, <i>Kokoro</i>
1897		L. Hearn, <i>Gleanings in Budha Fields</i>
1898	L. Hearn, <i>Exotics and Retrospectives</i>	
1899	W.G. Aston, <i>A History of Japanese Literature</i> L. Hearn, <i>In Ghostly Japan</i>	
1900	L. Hearn, <i>Shadowing</i>	
1901	L. Hearn, <i>Japanese Miscellany</i>	C.E. Maitre, <i>L'Art du Yamato</i>
1902	B.H. Chamberlain, "Bashō and the Japanese Poetical Epigram" L. Hearn, <i>Kotto</i>	L. Hearn, <i>Japanese Fairy Tales</i> F. Brinkley, <i>Japan, Its History, Arts, and Literature</i> B.H. Chamberlain, <i>Things Japanese</i> , 4th ed.
1904	L. Hearn, <i>Kwaidan</i>	A. Bellessort, <i>La Société Japonaise</i> L. Hearn, <i>Japan</i>
1905	B.H. Chamberlain, <i>Things Japanese</i> 5th ed. Y. Okakura, <i>The Japanese Spirit</i> J.C. Balet and L. Defrance, "Japanese Poetry" P.L. Couchoud, <i>Au fil de l'eau</i>	
1906	P.L. Couchoud, "Les Épigrammes lyriques du Japon" F. Gregh, "Quatrains à la façon des Haikai japonais" K. Florenz, <i>Geschichte der Japanischen Literatur</i>	
1908	A. Neuville, <i>Haikaïs et Tankas, Épigrammes à la Japonaise</i> S.H. Wainright, "Appreciation of Nature in Japanese Poetry"	S. Kimura & C.M.A. Peak, <i>Sword and Blossom poems from the Japanese</i>

英米文学への俳句の移入

資料 II (1) T.L.S. における日本関係の書籍の広告と書評

1905	広 告	書 評	俳句関係	1906	広 告	書 評	俳句関係
1. 6	○			1. 12	○		
20	○	○		19		○	
27	○			26	○		
2. 3	○	○		2. 2	○		
10	○ △		L. H	9	○		
24	○			16	○		
3. 3	○			23	○	○	
10	○			3. 9	○		
17	○			16	○		
24	○			23	○	○	
31	○ △		J. P	30	○		
4. 7	○			5. 11	○	○	
14	○			6. 15	○		
21	○	○ △	J. S	29	○		
28	○			7. 13	○		
5. 12	○ △		J. S	20	○	○	
26	○ △		J. S	27	○		
6. 2	○ △		J. S	8. 3	○		
9	○			17	○		
23	○ △		J. S	24		○	
30	○			31		○	
7. 7	○ △		J. S	9. 7		○	
21	○			21	○ △		L. H
8. 11		○		10. 5	○		
9. 1	○			12			広告中止 ²
8	○	○		19	○	○	
15		○		26	○		
22	○	○		11. 2	○		
29	○			12. 14		○	

岩 原 康 夫

1905	広 告	書 評	俳句関係	1906	広 告	書 評	俳句関係
10. 6	○	○		28		○ △	L. H
13	○ △		L. H				
20	○						
27	○ △		L. H				
11. 3	○			注 1. ○—日本関係のものが出ていることを示す。 △—多少なりとも俳句に関係するものであることを示す。 L.H—L. Hearn の著作 J.P —Japanese Poetry J.S —Japanese Spirit 2. 出版カルテルと T.L. S. の間に本の販売に関して争いが生じ、広告が中止になる。広告中止以降は出版カルテルに属する大手の出版社の広告は完全に姿を消す。			
10	○ △		L. H				
17	○	○ △	L. H				
24	○						
12. 1	○	○					
8	○						
15	○						
22	○						
29	○						

資料 II (2)

1907	広 告	書 評	俳句関係	1907	広 告	書 評	俳句関係
1.11	○			26	○		
18		○		5. 3	○		
25		○		6. 7		○	
2. 1	○			28		○	
8	○			7.12	○		
15		○ △	L. H	8. 2	○		
22		○		9.13		○	
3.15	○	○		10. 3	○		
22	○	○		11. 7	○		
29	○	○		12.19	○		
4.12		○					

(いわはら やすお 本学講師 英語)